
灰色の神話

ぬじゃわきし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

灰色の神話

【Nコード】

N 6 6 2 3 N

【作者名】

ぬじゃわきし

【あらすじ】

灰色の街で、“神”によって死を運命付けられ、運命の使者に命を狙われる青年メーラン・モーテ！はたしてどうなるのか！？真相はいかに！？

起・・・講義

灰色の街がある。なぜ灰色なのかと言うと、緑はほとんどなく、灰色のアスファルトに覆われているからだ。ビルや窓や、紙など、四角形の形ばかりが見られるため、四角い街とも言われるが、やはり灰色の街、の呼称が一般的である。都市も四角ければ人間もどことなく四角く、やるべき仕事さえ為せばいい、と言う四角四面の常識的な人間ばかりであった。彼らはあまりにも無思考だったため、雑談も少なく、そのため街は静かでひっそりとしてて灰色の雰囲気をさらに色濃くしていた。娯楽もテレビやスポーツセンターなどさして非常識ではない娯楽ばかりだが、彼らはそれを真面目に、深く笑うことなく取り組み、コメディアンに対しても定式通り笑うべき所で笑う、といった有り様であった。

街の中心には中央大学があった。大学内には神殿があり、そこは神を祀る、神殿の役割を担いつつも、大学の講堂にも使われていた。そこで哲学の教授ジャヌーイが何やら生徒に向かって演説していた。石でできた講堂なので声は響く。

「では、殺人とは悪なのか。そう。悪なのだ。人にはそれぞれ生きる権利があり、それを剥奪する事は許されない。あいつはひどいやつだ、でもだからと言ってあいつが生きる事を無くすのとは本来は関係ない。生きる事には可能性があるからだ。可能性を奪うのは大いなる損失だ。」

「ぐー…」

いびきをかいて居眠りする生徒をジロリと見ながらもジャヌーイ教授は話を続けた。

「だが、不思議な事に、我々人間は人の死をどこかで興味を持っている。殺人を見たい、死ぬ姿を見たい、死を直視したい、そう言う無意識な願望がある。その証拠に、映画や小説は、大概誰かが死ぬ事で話が成り立っている。壮大であればあるほど誰かが死ぬ。」

ジャヌーイ教授は講義机にある水を一口飲み、コップを置くと話し続けた。

「不思議な話だ。我々人間は身近で人が死ぬのを嫌がる。なのに、映画などで目の前で人が死んでもさして抵抗感がない。むしろ、ザマミロと喜ぶ者すらいる。これは何故か。」

ジャヌーイ教授が言葉を止めると生徒のレミトンが手を上げた。教授が「レミトン君、分かるかね？」と訊ねると、彼女は優等生らしいきはきとした口調で答えた。

「それは、映画や小説は虚構だからです。あれらは現実ではなく娯楽に過ぎないからです。」

「大体正解だ。レミトン君。君に5ポイント差し上げよう。だが、足りない点、正確な点が一つある。何か分かるかね？」

「…いいえ。」

「虚構は娯楽ではない。儀式だ。神話から起源がある。神話とは多くの神が争い形成する話だ。この神は一神教でいう、全知全能の神とは質が違う、ある種象徴に近いものだ。それらの人間臭さから、人間の一面の象徴と思われる。怒りならば怒りの神、母性愛なら母性の神、死の恐怖なら死神と、それらの神を火や太陽や骸骨など、森羅万象と合わせて象徴化している。」

ジャヌーイ教授は座りながら話し続けた。

「虚構の登場人物も原理は同じだ。神話の殺人（殺神）が神聖なように、虚構の殺人も神聖なのだ。殺す存在、殺されるべき存在がある。悪の不条理、正義の勝利、いずれもどの形であれ、潜在的に殺人が生じうるが、どちらも意味がある。殺す事にも殺される事にも意味がある。我々が鑑賞者という神の目で虚構を見る限り、これは真実だ。だが、この現実で当事者にこんな事を言ったら、お前に何が分かると罵られ、下手すれば私は殺されるだろうな。それも意味があるかもしれんがな。」

ジャヌーイ教授が皮肉をこめてそう言うと、何人かの生徒がふふふと笑った。

「まあ、さっきも言ったが我々は虚構においては神の目で見ている。全知全能の神の目だ。別世界を眺めてるのだからな。神が如何に残酷に分かるだろう？我々も同様な残酷さを持って映画や小説を見ているのだ。あるいは作っている。」

しばしの沈黙。やがて一人の青年、メーラン・モーテが「教授。」と言って手を上げた。ジャヌーイ教授は「何かね？メーラン君。」と訊ねると、彼はくしゃくしゃの瘦せた頭を上げ、少しかすれた声で言った。

「質問があります。」

「だから何かね？メーラン君。」

「そうになると、儀式といえどもあらゆる神話が虚構になりますよね。」

「君は神話は本当の事だと思うのかね？」

「そこまでは言いませんが…人のつくりごとだと単純に否定しているとは思いません。」

「いつもいつも思うが、君は面倒くさいやつだな。」

皆がどっと笑う。それを静止して教授は言った。

「だが君の話はもつともだ。この話は神話を実際に起きてない事を前提に話をしている。だがこの前提が崩れる事は有り得る。」

「すると、どの虚構も、儀式ではなく実際に起きている、と仮定できますよね？」

「…無論、そうだ。だがこの現実にくきたと考えるのは早計で、心の中で真実と言う言い方もある。明らかに現実離れした話なのに真実性がある、あの感覚だ。」

「…そうなる…形而上学的な話ですが…心の中の真実とは心の中の世界なので、言い換える…この世界とは別に世界があると言う事になりますよね？虚構は一つの世界で言う事に。」

「…まあ…うん…それは多元宇宙の考え方だな…」

そしてメーランはジャヌーイを真っ直ぐ見つめて言った。

「教授…では、この現実…虚構なのでしょうか。」

しばし講堂内は静まり帰った。時計の音だけがことごとと鳴るだけだ。教授は手を組みながら考え続け、やがて顔を上げてメーランに言った。

「まあ、君にももうすぐ分かる時が来る。そう、もうすぐな…」

何となく意味深なその言葉にメーランは訊ねようとしたが教授は「授業は終わり！」と叫び生徒達ががたと片付け始めた。メーランは「教授！教授！」と後を追ったが、ジャヌーイ教授はさっさと講堂に出てしまった。メーランは後を追ったが、結局見失ってしまった。彼は思った。「もうすぐ」とはどういう事だろう、と。

承・・・お告げ

その後、メーランは一人虚構とは何かと思索しながら大学構内を歩き回っていた。周囲の生徒はメーランのくしゃくしゃ頭を見て、ある者はひそひそと話し、ある者は指差してくすくす笑い、ある者は目を背けていた。彼が神経質な変わり者だったからである。見た目も少々異様で、前述したように乱れきった髪の毛に、痩せ細った顔形、目は張りつめたように大きく、顔色は悪く、体も針のように細いが、肩幅だけはやや広かった。おまけに服装も黒づくめ。そのマッド・サイエンティストのごときの風貌に皆不気味がっていたのである。その上彼は、細かい事にうるさく、それで嫌っている人すらいた。

さて彼は歩きながらふと、合唱の歌声に気づいた。神殿からだ。古代の聖歌を歌っていた。単旋律で荘厳であった。あの神殿で祀っている神が何か、メーランにははつきり分からなかった。そのため神殿で見かける白服のスーツの集団を不気味に感じた。あれは神殿の聖職者で、通称「運命の使者」と呼ばれていた。いったい何をする集団なのかは分からない。何故ならメーランはまだ神殿に入る事を許されなかったからだ。

虚構の思索が堂々巡りした。実体が掴めなくなったからだ。彼はその時いつも、あるバーに寄る。そこは安くて狭いが、ステージがあって、そこでいつも何かしらの音楽が奏される。それが楽しかったのだ。

今日も、純白のドレスを着た若い女性の歌手が、ギターのボサノヴァの伴奏に合わせてそのリズムに乗りながら歌った。

＊

♪ 白いわたしと 黒いあなた
二人で 灰色の幸せ

灰色 それは 砂の粒
砂は海に 運ばれ

Ah! 世界を旅する わたしたち
昨日も今日も 青のバカンス
Ah! でもそれで いいのかしら
灰色の幸せが 懐かしくて

白いわたしと 黒いあなた
砂より 運ばれない岩になろう

わたしとあなた ここで作りましょ

灰色の幸せ

＊

拍手が鳴り響き、白ドレスの歌手は一礼した。メーランは何となく
気が晴れた。そしてバーに出た時「♪灰色の幸せ～」と歌いながら
家へと帰りついた。

家も灰色である。鮮やかな色彩はこの街では相応しくないと考えら
れていた。メーランはいつも電気を点けていなかった。夜の暗闇が

好きだったからだ。月明かりの眩しさが好きだったからだ。彼は窓のすぐ近くのベッドに仰向けになって、月を見るのが好きであった。月はアスファルトだらけの街と街を覆う壁を冷たく照らし出していた。そう。街には壁が厚く覆っていたのである。街境に当たる部分に200mもの鉄壁がそびえ立っていた。どこにも出る道は無い。したがって街から出ることは出来ない。バーの歌はその意味も多少ながら含んでいた。

次の週も神殿でジャーヌーイ教授が講義をしていた。

「前回のおさらいをしよう。前は虚構における視点と現実における視点の違いを述べた。殺人事件を例に出したのかな？人は現実においては殺人を目撃するのを嫌がるが、虚構においては逆に殺人を潜在的に見たがっている。その理由は虚構という作られた別世界に置いては、人間は全知全能の“神”の目を持つからだ。そして虚構は、登場人物という精神存在の“神”が織り成す神話である。儀式である。ここまで言ったかな。」

ジャーヌーイ教授は講義机のコップをとって、中の水を一口飲んだ。

「では、この現実はどうなるのか、という話になる。もしかしたらこの現実も、何者かが作り、何者かがそれを観賞してるのかもしれない。だとしたら恐ろしいわな。君達の一挙一足、勉強や会話やトイレや風呂や娯楽や人間関係や隠れた趣味や悪行、全て“神”達に観察されているのだ。君達が物語を読むように。」

何人かが悲鳴を上げた。

「だからこれから起きる殺人事件すら、創造主のご計画であり、別の神にとっては一つの興味の対象だ。」

これから、という微妙な表現に生徒らは皆不審に思ったが、あまりに過激な意見にメーランは逆上して叫んだ。

「教授は神を馬鹿にしています！」

だがジャヌーイ教授はニヤリと笑って答えた。

「おっと…来ましたな…私は馬鹿にはしていません。むしろ一人の人が死ぬと言う一大事に全く興味を示さないのは異常です。興味で言い方が悪いのですな。」

「教授はまるで神を知っているような口ぶりで話されますな。ひよっとして、神を知ってるのでしょうか？ひよっとして…『運命の使者』？」

生徒らは息を吞んだ。街において、神殿に関わる事を口にするのはタブーだったからだ。ジャヌーイ教授も、顔は笑っていたが、声は冷たい怒りに満ちていた。

「メーラン君。君は言うてはいけないことを口にしたようだね。まあいい。君の運命はどうせ決まっている。そうだ。君の言うとおりだ…灰色の創造主から我々にお告げが来たのだ。お前はじきに、殺されて、死ぬとな。」

教授の背後から、突然白いスーツの「運命の使者」達が現れた。生徒が次々と悲鳴を上げ、逃げようと勉強道具を片付け始めた。教授が言う。

「いや、諸君は、大丈夫だ。目標はただ一つ。メーラン・モーテへの預言の成就だ。」

「運命の使者」たちはじりじりとメーランに迫ってくる。メーランは後ずさりしながら叫んだ。

「なぜだ！なぜ僕は死ななければいけないんだ！教授は、先週も、現実の死がとんでもないことだ、虚構でなければ許されない悪だと仰っていたじゃないですか！」

「そのとおりだ、メーラン・モーテ。だが、君は気づくべきだった。現実には虚構でもあるのだ。従って、ここは儀式だ。我々は君を殺し、君は殺される。そういう儀式だ。我々は人のためにあらず、神のために行動している。そうだ。君には殺されるという役割を与えられた一つの精神的存在の“神”なのだ。その使命に感謝して死に給え。」

「いやだ！」

「君はこの神聖な使命から逃げるというのか？君は殺されて死ぬために産まれてきた。死とはあらゆる意味で神聖だ。君はその祝福、その使命運命、その役割を与えられていながら、逃げるというのか？そうだ。逃げるというのか？」

「死ぬよりはマシだ！」

メーランは講堂の神殿を抜け出した。白スーツの「使者」たちも後を追って、次々と講堂を駆け抜けて、メーランを殺そうと追いかけた。

転・・・逃亡

神殿から抜けたメーランは大学構内を急いで見回した。とりあえず、食堂に逃げた方が良いと思った。人が沢山いるから、そこでは容易に殺せまい。

食堂の入り口に着いた。と、そこに、扉を抜けて白スーツの青年が現れた。運命の使者だ。

メーランは息を飲んで引き返して逃げた。使者の青年は「ここにいろぞ！」と叫んで、追いかけた。

息急ぎ切って走るメーランを見て、ある者はひそひそ話し、ある者は呆然とし、ある者は「どうした？」と訊ねかけた。メーランはそれにいちいち反応する訳にもいかず、とにかく走り抜けた。背後から数人も運命の使者が、こちらを殺しにやってくる。銃声が響いた。一瞬耳をかすめたような気がして、ぞっとした。

メーランはひとまず大学を出た。恐らく奴らはそれでも街内で彼を探し回るだろうが、時間稼ぎにはなる。彼は大学から少し離れた、広い金属の廃棄場の隅に隠れた。傍に小さなパイプがある。彼は思った。こっちがやられる前に…やるしかない、と。

やがて、すぐに運命の使者が一人現れた。矛を持っていた。柄まで金属製だ。使者はゆっくりと、どこかに死ぬべき者がいないか探しながら練り歩いた。金属の山を覗き、ひっくり返しもした。

メーランは鉄パイプを持って隠れながら構えた。このまま去ってくれば一先ず安心である。やがてメーランは鉄パイプを持つのに疲れ、持ち変えようとした、その時、鉄パイプが他の金属廃品に衝突し、がちやり、と音を立てた。メーランは一気に冷や汗をかいた。

使者が気づいた。矛をもってこちらに近づいた。メーランはパニックになった。いずれはバレるに違いない：バレたら至近距離だから確実に死ぬ。

メーランは叫んで、鉄パイプを持って使者に迫った。使者も矛を持ってこちらに突進した。無我夢中でメーランは使者の矛を強く払った。使者とメーランは衝突した。メーランは金属廃品の山に背中がぶつかったただだが、使者は後ろにのけぞって地面の小さな鉄片に頭を打って昏倒した。

その直後に、恐らくさっきの使者が通報したのだろう、次々と使者らが現れた。その数6人。これは勝ち目がない、とメーランは判断し、再び逃げる事にした。廃棄場の塀を登り、入り口とは反対側に逃げた。道の右を行き、左を行き、なんとか5人ほど撒いたのだが、一人、駿足の者がいて、走っても走っても、白スーツの使者が、駿足独特の美しいフォームで追いかけてきた。気がついたら大通り。メーランの目の前で車が何度も掠めた。メーランはすぐ見回した。側に立派な歩道橋が建っているのが見え、メーランは急いでその階段を登った。

だが、突然腕を捕まれた。

「わっ！」

振り返ると、人形のように端正な使者の顔があった。使者はメーランの全身を橋の欄干に押さえつけて言った。

「下を見る。」

体を捕まれながらもがきながらメーランは拒んだ。

「下を見る！」

使者は強引にメーランの首を橋の外に押し出した。

「わあっ！」

メーランは肩で使者に抵抗しながらも、橋の下が見えてしまった。橋の下道路には次々と高速に車が過ぎ去っていく。ここから落ち

たら轢き殺される…とメーランが冷や汗を掻いた時、使者が言った。
「見たまえ。ただ車が走っているだけに見えるがそうではない。車
達が走りながら、橋の君を轢こうと待ち構えているのだよ。獲物を
求めるピラニアのように。」

メーランは恐怖で目の前がぐるぐる回るように感じた。車が僕に牙
を剥いている。

「そうだ。今や偶然自然の現象すら君が死ぬのを待ち構えている。
もはや、つまりそれは定めだ。運命だ。我々はそれを助ける存在。
しかしなぜ拒むのだ？君の死は運命に祝福されている。喜んで死ね
ばいいものを。」

メーランは今にも落とそうとする使者を抵抗しながら死に物狂いで
言った。

「…それは…本当の神…の祝福では…ない…本当とは…認めない…」
「ふん、あくまで自分のエゴを突き進めるつもりだな。この世界の
登場人物の癖して。では尚更死ぬべきだ。」

使者が突き落とそうと力を準備した、その隙に、メーランは使者の
腕をつかんで背中から投げた。

「わああああ！」

使者は橋の外へと転げ落ち、地面についた途端たちまち車が使者に
群がって骨の髄まで使者を漁り尽くした。

そして別の5人の使者がメーランを発見して歩道橋を上がってきた。
メーランは急いで逃げた。歩道橋を降りて、すぐ傍に小さな美術館
があった。無料で美術展をしていた。メーランはそこに逃げた。

さすがに美術館内で殺人なんて物騒な事はしないらしい。使者達は
美術館の外で立って見張っていた。恐らくあらゆる出口が見張られ
ているだろう。八方塞がり意識しつつ、メーランは美術館で一休
みする事にした。美術館にはさまざまな大理石の石造が静かに置か
れていた。

そして考えた。まず、永久に逃げられない。灰色の街は高い高い壁に覆われている。どこまで逃げてでも永久に追いかけられるだろう。

“神”のご意志により…

そもそも、“神”とは何者なのか。灰色の街で崇められる存在。秘められた存在。しかし、何故か自分を殺したいらしい。何故か。自分が何の悪い事をした。それは死に値するのか。

（それは、死刑囚の悪人ですら思う事だよ）とジャヌーイ教授の声が頭の隅で聞こえる。（善人にも悪人にも、同様に死は来る。君は殺されて死ぬと運命づけられただけだ。ごく当たり前の真実を君は避けているだけなのだよ。）

その思念を、うるさい、とメーランは思った。違うのだ。他が何て言おうとあれは真実じゃない。僕にとっては強引だ。僕にとっては真実じゃない。そうだ。真実じゃない。

「あくまで認めないつもりらしいじゃないか。」

本当のジャヌーイ教授の声が聞こえてメーランは驚いた。気がつけば美術館内には、美術品の石造と教授とメーランしかいなかった。教授が話す。

「君があまりにも運命を認めないと、彼らから話を聞いたよ。そうだ。どうしてだ？私が話そうじゃないか。大丈夫。ここは美術館。私は君を殺しはしない。」

今度は説得するつもりなのだな・・・とメーランは悟った。ついに教授との対決が迫った。心と心の対決が。メーランは構えた。

結・・・終わりへ

ジャーヌーイ教授は訊ねた。

「君は死の運命に疑問があるのかね？」

「はい。」

「それは何かね。」

「なぜ、僕は死ななければならないのでしょうか。」

「それは簡単だ。人は皆死ぬ。君はそれが定められてるだけだ。」

「僕にはそれが自然の運命、定めとは思えません。」

「つまり、人為的に感じると：」

「はい。」

教授は暫く黙り、やがて美術品の周りを歩き回りながら訊ねた。

「君は、伏線、と言う言葉を知っているかね？」

「はい。物語の一見関係ないようで、後に繋がる部分の事ですよね？」

「そうだ。例えば、現場の時計が全て壊れていた。それは一見事件解決には関係ないと思われるが、実は犯人を特徴づける重要な意味を含んでいた、とかな。」

「：はい。それで？」

「伏線とは予兆、予兆とは運命の定めだ。虚構における伏線は、現実の運命。例えば、喧嘩してマンションを抜け出したから、その後に起きたマンションの火災から命を救われた、とか、謎の番号を夢見て頭から離れなかったが、実は宝くじの当選番号だったとかな。」

「何が言いたいのですか？」

教授は立ち止まってメーランを向いて言った。

「君の死は運命づけられていたのだよ。全てに置いて死への伏線が張られていた。聞いただろう。あの歩道橋から死んだ使者の言葉を。『今や偶然自然の現象すら君が死ぬのを待ち構えている。』その通りなのだよ。」

教授はメーランに一步一步ゆっくり迫りながら言った。

「派手さを求めず、ひたすら統一化、平坦化を求める灰色の街で君は一人浮いていた。」

「やはり、それが原因ですね。」

「いいや、勘違いしないでいただきたい。これは灰色の街という組織の殺人ではない。運命だ。その違いを理解していただきたい。これは伏線の一例に過ぎない。」

「では他にあるんですか？」

「君は黒い服を来ている。」

「そうですか。黒は死を現す、て事ですね。」

「そんな安直な話ではない。君は『灰色のボサノヴァ』を聞いたことがあるか？」

「はい？」

「『灰色のボサノヴァ』聞いたことがあるはずだ。」

そう言ってるうちに、笑顔の教授の背後から、ドラムやピアノやベースギターやボーカルが現れ、バーで聞いたあの曲が豪華にジャズ風にアレンジされ、歌われた。

＊

♪ 白いわたしと 黒いあなた
二人で 灰色の幸せ

灰色 それは 砂の粒
砂は海に 運ばれ

Ah! 世界を旅する わたしたち
昨日も今日も 青のバカンス
Ah! でもそれで いいのかしら
灰色の幸せが 懐かしくて

白いわたしと 黒いあなた
砂より 運ばれない岩になろう

わたしとあなた ここで作りましょ

灰色の幸せ

*

音楽が終わると演者たちは一礼してゆっくり消えていった。
教授は言う。

「白いわたし：は運命の使者。白いスーツを来た使者。黒いあなた：は黒服の君だ。二人で灰色の幸せ：幸せとは運命だ。灰色の街の、運命。だが砂のように流されてはいけない。君は海を象徴する、永遠の青い世界には行ってはいけない。」

「永遠の青い世界とは何ですか。」

「君が死ぬ時に言おう。」

「しかし：」

「いいから聞きたまえ。神はそれに対し、砂のような軟弱さを求めなかった。だから岩のような強固さを求めた。君が確実にここで死ぬるよう、我々に宣言した。あれはそのメッセージだ。そう。だから君はそういう運命なのだ。」

「つまり、僕が青い世界とやらに行かないよう、僕をここで殺しておく、と言う事ですね。」

「全てが良き方向に行くために。」

「冗談じゃない。あなたたち神の使者とやらは何かを隠している！」
そう叫びながらメーランは窓を見た。窓の外の運命の使者がにこりと笑った。

「その真実を隠蔽するために、僕を殺すんだ！やがて僕がたどり着

くかもしれない事を恐れて！」

「君は実は以前も真実を口にしたが、まあいい。この真実だけは知られてはならない。灰色の街は不完全だからな…真実を知った時君はここにいられなくなる。」

「どういう事だ！」

「これ以上言わせるな！私だって言いたくもない！あれは本当に恐ろしい事実だ…運命の使者になって見させられた…」

「青い世界を？」

そうメーランが直感的に訪ねられると教授が一気に青ざめるのが見えた。メーランは追い討ちをかけた。

「青い世界が…このどこかにあるのですね？」

「うるさい！だまれ！」

「どこですか？教授。」

倒れこんでしまった教授の顎をつかんでメーランは訊ねた。教授は笑いだし、呟くように喋った。

「もはや…いいだろう…実際に…分からないと…な…しかし…分かった所でもはや遅いがな…ぐはは」

そしてメーランを見つめて言った。

「神殿の頂上に、青い世界に直結する穴がある。そんなに殺されたくなければ行きたまえ。二つに一つだ。行け！」

そう言って教授は笑いだし、何も語らなくなった。メーランはもはや会話は終わりだなと察し、美術館から勢い良く出た。白い運命の使者が、黒いメーランを追いかけた。メーランは力の限り逃げた。大学が見え、メーランはその門を駆け抜け、神殿の入り口に入った。神殿内の他の運命の使者がメーランに襲いかかったが、それを振り払いながら、神殿の階段を上がっていった。上の光目指して。

そして屋上にたどり着いた。穴など見当たらない。どこにあるかと探し回った。屋上には神殿を支える巨大な柱四本と、床しかない。メーランはふと思いついて柱を登った。すると、メーランは、柱の

うち一本が中空になっている事を発見した。穴は地下へ地下へと繋がりが、最深部も突き抜けて穴が開いていた。ここから落ちるしかないか。

どうしようか、勇気が出ずにメーランが迷っていたとき、階段から次々と運命の使者が現れた。殺されるか、否か。

メーランは一つを選択をした。穴に身を投じたのだ。真っ暗の穴の周りが高速に過ぎ去り、やがて明るくなった。それは青かった。青の世界。落ちながらメーランは天を見上げた。巨大な灰色の板。いや、落ちていくうちに箱の底面と分かった。さらに上には雲が見える。そうだ。灰色の街は空に浮かんだ箱だったのだ。街以上の広がりなどあるはずがない。青い世界とは灰色の外にあった。歌の通りだ。流されて、“海”である空へ行く。

そうか。最初自分が疑問した通りだったのだ。ここは虚構だったのだ。ここは空を背景に作られた場所。場所から出たらそこには何もなく、地に足が着くことなく、戻る事もできない。空が背景とはいえ、やがて限界は来るであろう。限界は徐々に来た。青い空はやがて暗くなり、空というレイヤーを抜け、ただの無へと行く。だが、無には何も無いから、落ちるという過程は全て略され、やがて、虚構の世界からも抜け出て落ち、この文字上からも抜け落ち、その果てに、やがて、あなたの足元に墜落する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6623n/>

灰色の神話

2010年10月9日11時27分発行